

訪問授業 ハンナのカバン紹介

命の大切さ知ってほしい

「ハンナのかばん」訪問授業(村、村教委主催)が2月25、26の2日間、村内の児童館、小中学校で開かれました。

2日間で約300人が参加し、特定非営利活動法人(NPO法人)ホロコースト教育資料センター代表の石岡史子さん(36歳、東京都在住)の翻訳書「ハンナのかばん」を題材に子どもたちが命の大切さを考えました。

児童書「ハンナのかばん」は第二次大戦中、アウシュビッツ(旧ユダヤ人収容所「ドイッ」)のガス室で13

歳の生涯を閉じた少女ハンナの生涯とその半世紀後、偶然ハンナが残した旅行カバンと出会った石岡さんが、そのカバンに書かれた文字の意味を探しにドイツやチェコなどに旅に出るストーリー。

石岡さんはそのカバン(複製)を持参し、ハンナが幸せだったころの生活やユダヤ人というだけで虐殺されたこと、戦争による差別や偏見の心などをスライド写真で紹介しました。

一方、その中で勇気をもって団結し、ユダヤ人を守った人々がいたことも話し、ハンナ



ハンナが使っていた旅行かばんに書かれた文字や数字の意味を説明する石岡さん

は「ハンナのカバンから一人の命の大切さを感じ、兄ジョージの命からたくさん命が生まれ、無限大の可能性が広がっています。どうしたら平和な世界、命を大切にできる社会をつくっていくのか考えてほしいです」と語り掛けました。

子どもたちは懸命に聞き入っていました。

本事業は訪問授業のほか児童書を全児童生徒に配布。熊坂伸子教育長は「この一冊の本を一人ひとりが自分の宝物として大切に、将来自分が親になったとき、この本を通して命の大切さを伝えてほしいです」と話していました。

皆さん、ありがとうございます

「うねとり荘」で鳥小迎え感謝の会

特別養護老人ホーム「うねとり荘」(大上重信施設長、入所者60人)では2月14日、鳥茂渡小学校(荒谷栄子校長、児童8人)の児童らを迎え、感謝の会を開きました。

開会で普代福祉会の野崎幸太郎理事長は「これまでの皆さんの車いすの活動などに感謝します。4月にはそれぞれ普代中、普代小に行かれますが、これまでの



手作りポーチのプレゼントに笑顔する鳥小児童

活動のように思いやりの心を持って頑張ってください」とあいさつしました。荒谷校長は「車いすを贈り続けられたのは、地区の皆さんの協力、うねとり荘の皆さんの『ありがとう』の気持ちに支えられたからです。今日1日、子どもたちと一緒に楽しく過ごしたいと思います」と話しました。利用者を代表して仲村サ

ンさん(93歳、久慈市)が、自身を手縫いで作ったかわいいポーチを一人ひとりにプレゼントし、ありがとうございますの気持ちを伝えました。

この日児童らはゲームを楽しんだり、一緒に焼きそばやケーキを食べたり、楽しい1日を過ごしました。



児童書「ハンナのかばん」を手に、命の大切さを訴える石岡さん

の兄ジョージが現在もたくさんの家族と元気に暮らしていることも紹介しました。

石岡さん